

M・ガイガーの美学史観と現象学的美学

峯尾幸之介(早稲田大学)

モーリッツ・ガイガー(Moritz Geiger, 1880-1937)の現象学的美学は、G・T・フェヒナーやTh・リップスといった心理学者たちによる美学への批判をその出発点としている。フェヒナーは、従来の思弁的形而上学的な「上からの美学」に対して、新たに経験的心理学的な「下からの美学」を提唱したが、ガイガーはまさにそれらいずれの美学をも乗り越えるものとして、現象学的方法を美学に応用している。ガイガーはこの現象学的方法のメルクマールを、〈現象の本質契機を直覚によって把捉すること〉のうちに見出している(cf. „Phänomenologische Ästhetik“, 1928, S. 145 f.)。経験的方法は諸事例からの「帰納」によって美的なものを研究するが、ガイガーによれば、そうした諸事例の枚挙そのものが、すでに美的なもの本質の暗黙の理解を前提しているわけである。そしてその本質を把捉するのが、現象学的な直覚のはたらきなのである。ガイガーによる心理学的美学批判の射程には、カントの趣味判断論さえも含まれている。ガイガーは趣味判断が主観的であり、かつ普遍妥当的であるというカントの洞察に一定の理解を示してはいるものの、基本的には、心理学的美学の先駆者として非難されるのである。

ところでガイガーは、遺稿「芸術の意義：遺稿の未公開テキスト」(1976年)において、カントや心理学ばかりでなく、美学史全体に対して論評を加えている。かれは従来の美学理論を絶対主義的方向性(形而上学や主知主義)と相対主義的方向性(歴史主義や心理学)とに二分し、いずれの方向性をも却下しながらも、自身としては再び新たに美的価値の絶対性を主張するにいたっている。しかしながら、いかなる意味において美的価値が絶対的であると主張されているのか、これに注意しなければならない。というのも、かれは絶対主義的美学の論評を、美がそれ自体として存在するとみなす「素朴な絶対主義」を退けることから開始しているのであり、ガイガーのいう美的価値の絶対性と素朴に主張される絶対性とは、本質的に異なるものだからである。

そこで本発表においては、遺稿「芸術の意義」や諸他の著作において提示されるガイガーの美学史観を確認し、いかなる点において現象学的美学がそれ以前の美学に対して優位をもつ(とガイガーが主張している)のかを明確にする。それをつうじて美学史における現象学的美学の位置づけについて論究してゆくことが、本発表の目的である。